

言語の神話と神話の言語

——「アダムの言語」をめぐる——

久 米 博

はじめに

アダムがエデンの園で話した言語は何語か。現代言語学からすればナンセンスなこの問いが、ルネッサンス以来ヨーロッパでは、真剣に議論されてきた。その議論は形を変えて、一九世紀に印欧語比較言語学が印欧語の祖語探求を断念するまで続いたと言える。なぜそのような問題提起がなされたのか、それを歴史的に探ろうとするのが、拙論の動機である。その問いかけには、いくつかの問題がからまっている。第一に、それは聖書解釈に関わる。旧約聖書「創世記」一、二章の創造物語と、一章のバベル物語とを結びつけて、どう解釈するか。次に、アダムが話した言語はヘブライ語か否かをめぐって、セム人種対アーリア人種という人種問題にそれは発展する。第三に、それは起源の言語、言語の起源の問題を孕んでいる。アダムの話した言語は、人類最初の言語、起源の言語なのか。アダムが神にならって事物に命名したとすれば、それは完全な言語だったのか。バベル以後、言語は混乱し、多様化したか、なぜ言語は唯一でないのか、なぜ多数の言語があるのか。その問いの背後には、失われた唯一で、完全な言語へのノスタルジーがある。また宇宙や言語の起源を知ろうとする、起源探求熱がある。さらに言語への愛は、マリナ・ヤグエーロの書名のように、人を「言語狂」にさせるものがある。しかしそうした言語への情熱や熱狂は、自民族中心主義、自国語中心主義に支えられているものである。そこから言語問題は容易にイデオロギーやナショナリズムの問題に転化する。のみならず言語に固有の難問題がある。言語について論じるメタ言語も、何らかの固有語 (idiome) であって、人類共通の普遍言語は、自然言語にも、人工言語にも存在しない

からである。

以上のような言語にまつわる神話的状况をどこまで非神話化できるか、それが拙論の課題である。

一、アダムと言語

最初にあった唯一の言語、それをユダヤキリスト教では「アダムと言語」と呼ぶ。すなわちエデンの園でアダムやエヴァが話し、アダムが生き物に名を与えた言語である。その命名行為によって人間は他の被造物と決定的に区別されることになる。しかし聖書以外にも、世界の神話には言語の起源を語るものがいくつもある。とすれば「アダムと言語」という語を、ユダヤキリスト教世界に限定せず、人類の話す最初の唯一の言語というように、一般化することができよう。

「アダムと言語」は言語学的には「言語単一起源説」につながる。最初のヒトのように、最初に生まれた唯一の言語から、やがてさまざまな異なる言語が派生し、分化していった、現在の多言語の世界が現出した、とそれは考える。この単一起源説に対立するのが「言語の多元発生説」である。それは、人間は進化の過程で共通の「言語能力」を備えるようになり、それを行使して、人間はいろいろな地域で、異なる言語を発生させた、とする説である。

この二つの説のいずれが正しいかを論じるのが本論の目的ではなく、「アダムと言語」という考え方がどのようにして発生し、どのような帰結をもたらしたかについて以下に論じてみたい。

「創世記」二章一九節で語られるアダムと言語は、一章の「バベルの塔」物語と結びつけられて、その本来の意味をおびる。すなわち単一言語から、多数言語への分散である。ジョージ・スタイナーが書名に選んだ『バベルの後に』(After Babel)とは、「言語の混乱」(confusio linguarum)と同義であり、そこから言語の混乱と分散とによってもたらされる人間世界の分裂、無秩序、ひいては墮落を意味するようになる。ユダヤキリスト教以外にも、いわゆる「バベル物語」があり、言語がなぜばらばらになったかを説明する神話はいくつもあり、したがって「バベル以後」を一般化することができよう。バベル以後とは、われわれが現に生きている世界の状況を指す。すなわち最初の唯一の言語が失われて、言語が多数化した結果、人々のあいだに意思の疎通を欠くことから不信や懐疑が生じた。それはわれわれの言語がかつてもっていた純粹さ、完全性、普遍性を喪失して、言葉と実在とのあいだの幸福

な一致がなくなってしまったからである。そこで言語の混乱は、何かの罰であると考えられ、そのように説明されるようになる。

アダムの言語は神から伝えられたもので、それはバベルの出来事までは、人間に唯一、共通のものである、とされる。それは現実世界の何語であるか。それはいうまでもなく旧約聖書と同じヘブライ語である、と一般に漠然と比定されてはいたが、それが正面から問題になるのはルネッサンス以後である。五世紀のアウグスティヌスはヘブライ語を知らず、ギリシア語もおぼつかなかった。彼にとり、言語は教会と信仰の言語であるラテン語だけで十分であった。中世を通じて、教会と神学の言語はラテン語であり、アダムの言語を復元する必要はなかった。アダムの言語が問題になるのは、教父たちがヘブライ語をバベル以前の人類最初の言語として受け入れ、ヘブライ語に回帰し、ヘブライ語が復権してからのことである。それは同時に、ダンテの言う俗語、つまり近代語が確立するようになった時期である。

唯一の神のもと、唯一の人類が話した唯一の言語であるアダムの言語は、直接神に由来する「原言語」(Ursprache, langue originaire)である、としてやがてこの「原言語」探求がはじまる。のちにそれは「普遍言語」「完全言語」「純粹言語」の探求を生じさせる。しかしそれはけっして同一の言語探求ではない。バベル以後のいわゆる「言語の混乱」を現在世界の状況とするなら、アダムの言語の探索は、過去への探索であり、やがてそれは一九世紀の歴史言語学における印欧語族の共通祖語の探索へと形を変えて引き継がれる。他方、言語の表層の多様性の基底に、深層の普遍性があるとする普遍主義の立場から、普遍文法を模索し、やがて普遍言語、完全言語の夢想が生まれる。それは未来への探求となる。ただしウンベルト・エーコがその著『ヨーロッパ文化における完全言語の探求』で言うように、完全言語と普遍言語、原初の言語と普遍文法とを区別する必要がある。⁽¹⁾ それによれば、完全言語とは「事物の本性をそのまま反映できるような言語」であり、普遍言語とは「万人が話すことができ、話さねばならない言語」を指す。また普遍文法とは、あらゆる言語に共通な文法原則である。ワルター・ベンヤミンがその論文「翻訳者の課題」で言及している「完全言語」「純粹言語」あるいは「ロゴス」を、上記スタイナーは、ユダヤ神秘主義の「言語観と結びつけている。

一方、理想言語の探求熱は、上述のヤグエーロのいわゆる「言語狂」たち (Les fous du langage) による、驚くべき数の人工言語を産出させた。⁽²⁾ このように過去への原言語の探索と、未来への理想言語の構築とは同じ作業ではない。もし両者に共通するものがあるとすれば、失われた完全言語へのノスタルジーであろうし、形を変えた言語の単一起源説への「死のうとしない夢」(エーコ前掲書)であろう。バベル物語の対極にあるのが、新約聖書「使徒言行録」二章で述べられる、いわゆる「多言語奇跡」であろう。す

なわち五旬祭で信徒たちが集まっているときに聖霊が降り、一同が語りだす。使徒たちは生まれ故郷のガリラヤの言葉で語るのを、いろいろな国や地方から来た人たちがそれを自国語を聞くように理解した、という奇跡である。これはキリスト教の世界宣教をめざす普遍語を示唆するものと解される。

さて、アダムの言語とバベル物語を、一方で原言語、他方で理想言語の探求物語として、ユダヤキリスト教世界を超えて一般化して考える前に、私はそれをまずそれを特殊キリスト教的、ヨーロッパ的現象としてとらえてみたい。アダムの言語の探求は、言語起源論をまきこんで、まさにヨーロッパのキリスト教世界において歴史的に展開していったからである。それは第一に言語と宗教との密接な関係を立証するものであり、典型的な自民族中心主義、言語的ナショナリズムへと発展していくものである。さらに、アダムの言語という神話は近代言語学の発生とともに消滅すべきものであるのに、じつは現代にいたるまでその神話はけっして払拭されていないのである。それは人々がいわゆる言語の起源というへ起源神話にとりつかれているからである、と私は見る。起源にまつわる神話を暴きだしたい、というのが本論における私の意図である。

二、聖書の言語神話

(一) 二つの創造物語

旧約聖書「創世記」の冒頭(一章一節～二章二五節)で、神による天地創造が物語られる。しかしここには二つの異なる創造物語が連接しているのである。すなわち一章一節～二章四aと、二章四b～二章二五節の二つの物語である。これは二つの異なる文書を並列した結果である。ユリウス・ヴェルハウゼンの研究によって、旧約聖書のモーセ五書の背後に四つの主な資料があると推定されるようになった。一番古い、紀元前九世紀に編纂された「ヤハウィスト」文書、紀元前八世紀に書かれた「エロヒスト」文書、もっとも新しい、紀元前五世紀に成立した「祭司」文書、この三文書が「創世記」を構成し、もう一つの文書は「申命記」である。前述の二つの創造物語のうち、第二の物語はヤハウィスト文書に属し、最初の物語は祭司文書に属すると言われる。

はじめに第二の創造物語(二・四b～二・二五)を検討しよう。それは次のようである。

「主なる神が天と地を造られたとき、地上にはまだ野の木も、野の草も生えていなかった。主なる神が地上に雨をお送りにならな

かったからである。また土を耕す人もいなかったからである。

しかし、水が地下から湧き出て、土の面をすべて潤した。主なる神は土（アダム）の塵で人（アダム）を形づくり、その鼻に命の息を吹き入れられた。人はこうして生きる者となった。主なる神は、東の方のエデンに園を設け、自ら形づくった人をそこに置かれた。主なる神は、見るからに好ましく、食べるに良いものをもたらすあらゆる木を地に生えいさせ、また園の中央には、命の木と善悪の知識の木を生えいさせられた。「・・・」

主なる神は人を連れてきて、エデンの園に住ませ、人がそこを耕し、守るようにされた。主なる神は人に命じて言われた。「園のすべての木から取って食べなさい。ただし、善悪の知識の木からは、決して食べてはならない。食べると必ず死んでしまう。」

主なる神は言われた。「人が独りでいるのは良くない。彼に合う助ける者を造ろう。」

主なる神は、野のあらゆる獣、空のあらゆる鳥を土で形づくり、人のところへ持って来て、人がそれをどう呼ぶか見ておられた。人が呼ぶと、それはすべて生き物の名となった。人はあらゆる家畜、空の鳥、野のあらゆる獣に名を付けたが、自分に合う助ける者は見つけることができなかった。

主なる神はそこで、人を深い眠りに落とされた。人が眠り込むと、あばら骨の一部を抜き取り、その跡を肉でふさがれた。そして人から抜き取ったあばら骨で女を造り上げられた。「・・・」

こういうわけで、男は父母を離れて女と結ばれ、二人は一体となる。人と妻は二人とも裸であったが、恥ずかしがりはしなかった。言語に関して、通常この創造物語で問題とされるのは、一章一九節でアダムが獣や鳥を命名したのは何語であるか、である。アウグスティヌスは『神の国』（第一六卷一章）で、エデンの園で話されていた言語がヘブライ語であると認める。ただしその認め方は消極的である。

「他の民族が異なる言語によって分けられたとき、それ以前の共通語であったと考えるのが正当であるような、この言語がヘベルの家族の中に残ったので、そこからこれはヘブライ語と呼ばれたのである。すなわち、当時他の言語もそれぞれ固有の名で呼ばれていたが、それと同じくこの言語を他の言語から固有の名で区別する必要があったのである。だがその言語しかなかった時には、その言語のみによって人類全体が話していたのであるから、ただへ人間の言葉Vとか、へ人間の話し言葉Vとか呼ばれていたにすぎなかった」⁽²⁾。

ヘベルとはノアの息子セムの子孫である。ヘベルがバベル以後に生きていたから、アダム以来の彼の言語も、他の言語にならって、ヘブライ語という固有名で呼ばれることになったというわけである。アウグスティヌスは『創世記逐語注解』で「創世記」を詳細に注釈しているが、二章一九節のアダムの命名に関しては、ごく僅かに触れているにすぎない。

「大洪水の後に建てられたかの塔の高慢さによって人間の一つの社会がさまざまな記号の音をもつ集団へと分けられてしまう以前は、初め唯一の言葉であったことをわれわれは学び知っている。その言葉がいかなるものであったかは、今問うべき事ではあるまい。確かにアダムは当時その言葉で話したのであるうし、もし今にいたるまでその言葉が残っているとすれば、最初の人間が地や空の動物に名を与えたその音声で、その言葉は組み立てられていよう」(第九卷第一二章)⁽³⁾

アウグスティヌスはエデンの園で話されていた言語がヘブライ語であると消極的に認めはしたが、それについてそれ以上の関心は示さなかった。それが何語であるか、ヘブライ語であるかどうかが問題になり、議論が沸騰するのはルネッサンス以後であり、そのことをモリス・オランデルはこうはっきり言い切っている。「ルネッサンス以降、エデンの園の言語はヨーロッパ中に出現した。どの民族も自分たちの固有語こそはエデンの園の言語だと思いたがったので、文字通り国をあげての論争が起きた」⁽⁴⁾

ここでその問題に入る前に、問わねばならないのは、神の語る言語と、人の語る言語との関係である。そこで第一の創造物語を参照する必要がある。祭司文書によるその創造物語(一・一―二・四a)はこうである。

「初めに、神は天地を創造された。地は混沌であって、闇が深淵の面にあり、神の霊が水の面を動いていた。神は言われた。『光あれ。』」

こうして、光があった。神は光を見て、良しとされた。神は光と闇を分け、光を昼と呼び、闇を夜と呼ばれた。夕べがあり、朝があった。第一の日である。

神は言われた。『水の中に大空あれ。水と水をわけよ。』

神は大空を造り、大空の下と大空の上に水を分けさせられた。そのようになった。神は大空を天と呼ばれた。夕べがあり、朝があった。第二の日である。[・・・]

神は言われた。『地は、それぞれの生き物を産み出せ。家畜、這うもの、地の獣をそれぞれに産み出せ。』

そのようになった。神はそれぞれの地の獣、それぞれの家畜、それぞれの地を這うものを造られた。神はそれを見て、良しとされ

た。神は言われた。『我々にかたどり、我々に似せて、人を造ろう。そして海の魚、空の鳥、家畜、地の獣、地を這うものすべてを支配させよう。』

神は御自分にかたどって人を創造された。

神にかたどって創造された。

男と女に創造された。

神は彼らを祝福して言われた。『産めよ、増えよ、地に満ちて地を従わせよ。海の魚、空の鳥、地の上を這う生き物をすべて支配せよ。』「・・・」

神は言われた。「光あれ」。こうして光があった。このように創造の第一日から第六日まで、神の創造は神の語る言葉によってなされる。それは「無からの創造」である。創造する言葉が、万象を現出させ、存在させる。そのような神の言葉とは、人の言葉と同じなのか。二章一六節で神はアダムに命令する。それをアダムは理解する。それについてエーコはこう解釈する。

「たいていの伝承では、それは一種の内的啓示による言語であると考えられている。神は、聖書の他の箇所でもそうであるように、雷鳴とか稲妻といったような大気現象によってみずからの意思を表明するのである。しかし、そう解すべきであるとすれば、ここには既に知の言い回しに翻訳することはできなくても、それを耳にする者がそれだけの天分をもっているか、恩寵をさずかったならば理解できる言語というものの最初の可能性が描きだされていることになる」⁽⁵⁾。

「光あれ」「光があった」、この「ある」を意味するヘブライ語の *hayah* 動詞は、ギリシア語の *on* とは異なり、繫辞としては用いられず、完全に動詞的な働きをもつ本来の動詞である。トリーフ・ポーマンは『ヘブライ人とギリシア人の思惟』において、ギリシア人の静的思惟に対して、イスラエルの動的思惟を強調するのであり、それはこの *hayah* 動詞に典型的に現れているとする⁽⁶⁾。すなわちこの動詞には、生成、存在、活動の三つの主要な意味があり、それは内的に連関しあっている。そこで彼は、「光があった (*hayah*)」は、「生じた」の意味に解すべきである、とする。アンドレ・ネルもまた、「創世記」のこの冒頭の一句を、「初めに言があった」として読むべきである、と主張する。すなわち、一章三節を「神は言われた／『光あれ。』／こうして光があった」というように切って読むのではなく、一章一節から三節の途中までを一息に読み、次に「こうして光があった」と読み、かつ理解しなければならぬのである。なぜなら一切は神の発話とともに始まったのであり、言葉は創造のわざなのであるから。言葉自体に創造力

があるのでなく、神が創造主なのである。⁽⁷⁾

アウグスティヌスは前述の注解で、「光あれ」と語られた唯一の言語はいかなるものか、として次の問いを發する。その言葉は誰にむかって發せられたのか、それは音声として理解されるのか、それともそれ自体は物體的音声でないものの、神の声として理解されるのか。そして彼はその神の言葉を、ヨハネ福音書の冒頭の「初めに言があった。言は神と共にあった。言は神であった」によって理解する。つまりアウグスティヌスによれば、「神はすべて創られたものを、自らの言葉によって創られた」のであるから、神の言葉と創造の業は一体なのである。「この御言葉は未完の被造物を自らのもとへ呼び出すのであり、それによって被造物は無形相でなくなり、個々に形相を与えられるのであり、このことは秩序に従ってなされるのである」⁽⁸⁾。神の言葉による創造とは、命名によってそれを存在せしめることである。命名以前には世界はカオス、混沌であった。創造の言葉は世界をコスモス、秩序宇宙に変える。他方、アウグスティヌスは二章一六節で神がアダムに話しかけられた言葉は、音声を介さない叡智的なものでなく、人間の言葉であると断定する。

「聖書が物語るところからすると、神が樂園で人間に語られたのは、後にアブラハムやモーセなどの族長に語られたような仕方、つまりある物體的な形象においてであると思う」⁽⁹⁾。

二章一九節のアダムの命名は、語彙としての名称の問題ではなく、事物と言語の関係の問題である。アダムは神から被造物に命名することを託された。それは神が創造したものを秩序づける、第二次的創造行為である。つまり人が被造物を自分の生活領域に組み入れる作業である。

エーコはこの個所について、神の言葉と人の言葉を区別せずに、こう書いている。

「他の宗教や神話にも共通して見られるように、ここで立法者Vのテーマ、すなわち言語の最初の創造者のテーマが立てられていることは確かである。しかし、何を根拠にしてアダムが動物たちに名をつけたのかはあきらかでない」⁽¹⁰⁾。

ここでいう立法者Vのテーマとは、プラトンの『クラテュロス』で論じられるように、アダムのつけた名が、事物の本性に即したもののなか、それとも約定できめられたもののかに關係しているのであろう。以上二つの創造物語を、神の第一次命名行為と人の第二次命名行為として解釈するとき、エーコのいう言葉の最初の創造者のテーマはそこにはない。つまり神が言語を創造したという記述はない。神の言葉にせよ、人の言葉にせよ、言葉ははじめから存在しており、自明のものとして、まったく問題とされていない。

い。「創世記」のみならず、旧約聖書の記者にとり、神の言語はメタ言語、言語の言語なのである。

ソシュール言語学の観点から二つの命名行為を比較するなら、アダムのそれは言葉以前に事物が存在し、言葉とは事物につけた名であるという、ソシュールの観点からは否定されるべき「言語名称目録観」に立っているのに対し、神の言葉による創造は、言語に先立つ観念を否定し、言語以前には何一つ明瞭に識別されない、というソシュールの考えに近いといえよう。そこには言語と実在の完全な一致がある。このメタ言語を、原言語とし、完全言語とすることができるだろうか。

(二) バベルの塔物語

「創世記」十一章の「バベルの塔建設と言語の混乱」の物語に先立つ一〇章で、ノアの子孫たちが各地に分散して住み、民族の系図が語られていることに注目しよう。すなわちその冒頭で「ノアの息子、セム、ハム、ヤフェトの系図は次のとおりである」として、それぞれの子孫が「それぞれの地に、その言語、氏族、民族にしたがって住むようになった」と記されている。ということはバベルの塔以前に、氏族、民族ごとに言語が異なり、多言語的状况になっているわけである。ただしこの民族表は、人類を人種別や語族別に分類しているのではない。しかもこの一〇章は祭司文書に属し、十一章一〜九節のバベル物語はヤハウイスト文書に属することを考慮する必要がある。一〇章の民族表は言語の混乱を強調するよりも、同じ祭司文書に属している九章一節の「産めよ、増えよ、地に満てよ」という神の命令の実現を示し、種族別の方言の分化を示すことに力点があると解すべきであろう。旧約学者ゲルハルト・フォン・ラートによれば、ヤハウイスト文書は天才的な物語性を持ち、神の裁きと神の救いの対象となる人間を描き出そうとするのに対し、祭司文書は即物的な叙述で、祭司たちの神学的営為の粋が集められているのである。

バベル物語の意図は、多言語的状况と神の罰とを結びつけようとするところにある。まず本文に即して検討してみよう。

「世界中は同じ言葉を使って、同じように話していた。東の方から移動してきた人々は、シニアルの地に平野を見つけ、そこに住みついた。

彼らは『れんがを作り、それをよく焼こう』と話し合った。石の代わりにれんがを、しっくい代わりにアスファルトを用いた。彼らは『さあ、天まで届く塔のある町を建て、有名になろう。そして、全地に散らされることのないようにしよう』と言った。

主は降って来て、人の子らが建てた、塔のある町を見て、言われた。

『彼らは一つの民で、皆一つの言葉を話しているから、このようなことをし始めたのだ。これでは、彼らが何を企てても、妨げることはできない。我々は降って行って、直ちに彼らの言葉を混乱させ、互いの言葉が聞き分けられぬようにしてしまおう。』

主は彼らをそこから全地に散らされたので、彼らはこの町の建設をやめた。こういうわけで、この町の名はバベルと呼ばれた。主がそこで全地の言葉を混乱（バラル）させ、また、主がそこから彼らを全地に散らされたからである。」（一一・一―九）

前半の一―四節では人間の行為と言葉が、後半の五―九節では神の行為と言葉が述べられ、随所に交差配列や頭韻法などの修辭的な技巧がこらされているのだが、それは逐語的に訳さねばわからない。一節の「一つの言語」と六節の「一つの民」、三節の「人がその友の」と七節の「人がその友の」、四節の「町を建て」と八節の「この町の建設を」などが対応する、といった具合である。また語呂合わせを多用する。「私たちは作ろう」（ニルベナー）と「れんがを」（レバーニーム）、「私たちはそれを焼こう」（ニスレファー）と「よく焼こう」（リスレーフアー）など。

このようにヤハウイストは古い伝承をかなり自由に作りかえていることがわかる。まず本文に即して解釈してみる。

同一の言語を話していた人類は移住をはじめ。シNealとはバビロニアを意味する。彼らは塔のある町を建設しようとする。彼らはイスラエルで用いられる建築材の石とすくいの代わりに、質的に劣ったれんがとアスファルトを用いる。天まで届く塔、というのを字義通りに受け取る必要はない、と注釈家は言う。人間が神の住まいに届こうとしたのではない。むしろこの重点は「有名になろう」とした点にある。また、「全地に散らされることのないようにしよう」という彼らの意図は、「産めよ、増えよ、地に満てよ」という神の命に反する。神のためでなく、自分のために塔のある町を建て、有名になろうとし、都市を建設して、人が一箇所に集中しようとする、この二点が神の意思に反するのである。

後半五―九節は、前半の人間の行為に交差配列的に対応する神の行為を述べる。神が「降っていく」のは、神の高みから見て、人間の営みの卑小さを示す。神の罰は、唯一の言語を多数化して混乱させ、互いに通じないようにし、同時に人間を各地に散在させることである。

どの注釈者も、バベル物語は人類が全地に拡散し、単一の言語が多くの言語に分かれ、言語の混乱が生じたことの原因物語である、とする点で一致している。フォン・ラートは、バベル物語がヤハウイストの語る原初史と救済史の接合点であると見る。すなわちヤハウイストは「創世記」二章の天地創造から一章のバベル物語にいたるまで、人間の創造、女、追放、殺人、大洪水といった人類

の罪が増大し、神と人類の関係が乱れていくのを描き出し、次に一二章からはアブラハムとその子孫に約束する救済史を展開するのである。

しかしながら「産めよ、増えよ、地に満てよ」という神の命令にしたがってノアの子孫が各地に散って諸民族を形成すること、多言語化による言語の混乱とは、因果関係によって結びつけられるのか。多言語状態を罰としてしまえるのか。もし諸民族の分散が神の意志に叶ったことであるなら、言語の分散と混乱を罰というより、当然の帰結として受け入れられねばならない。事実、祭司文書の一〇章三一―三二節では、「これらが氏族、言語、地域、民族ごとにまとめたセムの子孫である諸民族を、民族ごとの系図にまとめると、以上のようになる。地上の諸民族は洪水の後、彼らから分かれ出た」として、民族の分散と言語の分散とを事実上の所与として受け入れられている。現代の言語学者ロイ・ハリスとタルボット・J・テイラーは共著の『言語論のランドマーク』で、「創世記」二章と一一章の二つの神話を結びつけて解釈している。この二つを結びつけると、それは一つの謎かけに変わる。「雀はなぜハ雀▽と呼ばれるのか」。「アダムがそう呼んだからである」。「しかしアダムの子孫であるはずの他の民族がハ雀▽という名前を使わないのはなぜか」。「もしすべての人間が雀をハ雀▽と呼んだら、すべての人間が相手の言っていることを互いに理解できることになるからである」。つまりバベル神話は「すべての人間が雀を同じ名前と呼ぶことを、神が許そうとしなかった」ことを意味している。なぜなら言語は人間のつくったものでなく、「神からの贈り物」なのであり、人間は自分で言語を統制すべきでない、という意図を神がもっていたからである。⁽¹¹⁾ この二人の著者たちはヨハネ福音書冒頭の一節「初めに言があった」を引用して、ロゴスは神の属性であるから、と補足説明する。著者たちはアダムの言語、ただ一つの言語を、人類に共通のいわば太古のエスペラントと解する。だが彼らの言語学的解釈には疑問がある。「神の贈り物」であるという唯一、同一の言語を人間が話すこと自体、神の意思に反するものであろうか。アダムの言語を話すことが、「人間が自分で言語を統制すること」になるのだろうか。

バベル神話は離散（ディアスポラ）神話と言語神話が融合したもので、ディアスポラの結果として言語の分散が起きたのではないだろうか。前述のように、祭司文書の文脈にしたがうなら、民族の分散と言語の分散とは事実上の所与として受け入れられているのであるから。

ポール・リクールは論文「翻訳のパラダイム」のなかで、「主は彼らをそこから全地に散らされたので、彼らはこの町の建設をやめた」（一一・八）という聖書の記述自体に「いかなる不平、いかなる歎き、いかなる糾弾もない」⁽¹²⁾ことに注意を喚起する。彼らは

民族分散、多言語化の現実を受け入れたのである。その結果はどうなるか。リクールはワルター・ベンヤミンの論文題「翻訳者の課題」でもってそれに答える。つまりその結果として、翻訳の課題が生じたのである。「この生の現実から、翻訳しよう！」⁽¹³⁾

言語の分化を災厄と捉えるか、自然的傾向と捉えるか、あるいは言語がはじめから分化していたのだと考えるか、によって以後言語にまつわる議論は紛糾し、対立し、混乱することになる。

(三) 多言語奇跡

バベル神話は、前述のように、「使徒言行録」二章で述べられる「多言語奇跡」物語と照合される。まずその個所を引用しよう。

「五旬祭の日が来て、一同が一つになって集まっていると、突然、激しい風が吹いて来るような音が天から聞こえ、彼らが座っていた家中に響いた。そして炎のような舌が分かれ分かれに現れ、一人一人の上にとどまった。すると、一同は聖霊に満たされ、¹⁴霊が語らせるままに、ほかの国々の言葉で話した。

さて、エルサレムには天下のあらゆる国から帰って来た、信心深いユダヤ人が住んでいたが、この物音に大勢の人が集まって来た。そしてだれもかれも、自分の故郷の言葉で使徒たちが話をしているのを聞いて、あっけにとられてしまった。「・・・」彼らがわたしたちの言葉で神の偉大な業を語っているのを聞こうとは」(二・一〜二)。

舌(グロッサイ)とはギリシア語で、言葉を意味する。集まった人たちがそれぞれの言語で話しているのに、誰もがそれを、まるで自国語を聞くように理解できるとは！それが聖霊の働きによる奇跡である。聖霊によって、バベル以前の唯一の言語によるのと同じような、理解と一致が得られたというのである。一から多へが多から一へになった。これは、聖霊に満たされてキリストの福音を語る時、言語の違いや壁をこえて、福音が広がり、伝えられることを暗示している。聖霊が降ることは、復活して地上にとどまっていたイエスが昇天する際に、前もって約束されていた。

「あなたがたの上に聖霊がくだると、あなたがたは力を受ける。そしてエルサレムばかりでなく、ユダヤとサマリアの全土で、また、地の果てに至るまで、私の証人となる」(一・八)。

これは世界宣教の宣言である。宣教とは多言語の壁をのりこえることである。キリスト教会による福音宣教は多民族、多言語という状況でなされねばならない。そもそも新約聖書は、イエスや弟子たちが話したアラム語でなく、コイネーと呼ばれる当時の共通語

であるギリシア語で書かれた。それはすでにして翻訳である。しかも新約聖書の成立には、旧約聖書のギリシア語訳、とりわけ『七十人訳』が不可欠であった。新旧約聖書のギリシア語訳は、その後ラテン語訳にとって代わられる。とりわけヒエロニムス訳の『ウルガタ聖書』はローマ・カトリック教会公認として権威をもった。そのローマ・カトリック教会の権威に反抗した宗教改革は聖書の各国語訳によって推進された。つまりキリスト教の発展と革新に、多言語、多民族の状況に対応する翻訳の作業は不可欠なのである。「多言語奇跡」はまさにそのことを示唆しているのではないか。

しかしながらバベル神話を言語の混乱の起源神話とする解釈が、長い間ヨーロッパ世界を支配し続け、エデンの園でアダムが話していたのは何語であったかの探索に、多大の精力が費やされることになる。

三、原言語の夢想

今は失われてしまった、人類の祖先が話していた、唯一の言語へのノスタルジーが生じるのはそれほど昔からではない。バベルの塔の図像が大量につくりだされるのは、一〇世紀以後であるという⁽¹⁴⁾。それはヨーロッパにおける俗語発生の時期である。それまではコイナー・ギリシア語が、次いでラテン語が「共通語」としてヨーロッパに普及していた。エーコは「ヨーロッパはもろもろの俗語の誕生とともに「はじまる」と言い切る。つまり中世における種族の言語の発生と種族間の交流が、バベル的状况を意識させるようになったのであろう。種族間の言語が異なることは、種族間の意思の疎通を阻み、不信や敵意を誘発する。そうした言語的状况を招いたのは何らかの罰ではないか、といった「言語の混乱」の自覚が、さかのぼって唯一の、最初の言語、いわゆる原言語 (Ursprache) への夢想を育むのではないか。それは次のような考え方にもとづくのではないか。一から多への分化は、必然的に、分裂、無秩序であり、現在の言語の混乱は、言語の理想的状态からの類落にほかならない。エデンの園でアダムがエヴァと話す言語は、それによって互いに理解しあえ、完全に伝達できるような理想言語であった。アダムはその言語を、万物を「言葉によって創造した」神から習得した。そしてその言語を用いアダムは被造物に命名した。

このアダムの言語は具体的にどんな言語なのか。一方に、それを人類の祖語とする考え方があつた。そこから多くの言語が分かれ出た、とする単一言語起源論にそれは属する。他方に、神がアダムに教えたのは、完全な語彙をそなえた一つの言語全体ではなく、言

語を駆使する能力であるという考え方があつた。ダンテは後者の考え方に立った。これは言語の多元発生説に属する。この二つの言語発生説については、後でとりあげることにするが、古代ギリシアから、言語発生について考えることは、語の語源を探索することであつたということを考慮しなければならない。言語の問題とはまず個々の語の問題であり、語の意味論が中心の関心事であつて、音声の構造や、文法は二次的問題であつた。言語の探求は必然的に語源探索に向かつていった。

語源探索とは、語源によってその言語の正当性、根拠を立証しようとする、もともと原始的で、根源的な作業である。それをまずプラトンの『クラテュロス』によって検証してみよう。この対話篇は名前 (onomata) の正しさと主題にしている。名前の正しさは、事物の自然本性と一致していると主張するクラテュロスと、名前は取り決めと合意とによって定まると主張するヘルモゲネスとが対立し、それをソクラテスが調停するという構成になっている。対話は冒頭から次のようにしてはじまる。

ヘルモゲネス「こちらのクラテュロスがね、おオソクラテス、名前の正しさというものは、それぞれの有るものに対して、本来本性的に定まっている。そして名前とは、いく人かの人々がそう呼ぶことを申し合わせて、自分たちの言語の一部分として発音することによって、呼んでいるものではでなく、何か名前の正しさというものが本性的に存在しているのであり、それは外国人にも万人に同一のものであると、このように彼は主張するのです」(383A-B)。⁽¹⁵⁾

名前の正しさとは、名前とその指示対象の本性とが不可分にして一体であること、あるいは名前は事物の本性に即して定められていることを意味する。言語の起源に関連していえば、名前の正しさなるものは、言語が人為的に制定されたものでなく、自然に存在するものである、という主張につながるものである。だがソクラテスは言語を立法者の制作としてとらえ、言語規約説を主張するヘルモゲネスに反論する。立法者は、それぞれの用途に本性上適した名前の形を音と音節のなかに入れる術を知っているはずである。ソクラテス「クラテュロスが言っていることは真実なのだ。つまり、名前は事物に対して本性的に(自然的)に定まっているというところ、そして、だれでもかれでもが名前を作る技術者ではなくて、かの者——それぞれの事物に対して本性的に定まっている名前を手本として眺めて、その形を文字と綴りのなかに入れることのできる者だけが、そうなのだということ、真実なのだ」(390E)。

言語の立法者とは、言語の働き、機能、使用の観点から出てくる概念であつて、言語を恣意的に発明する人ではない。名前の機能は、ある事物を他の事物の在り方から区別することである。その目的のために、言語の立法者は言語を制作する。それが「名前の正しさ」である。

問題はソクラテスがその「名前の正しさ」を立証するのに、語源的説明に訴えることである。たとえば「英雄」(heros)は男神が人間の女性を、あるいは女神が人間の男性に「恋した結果」生まれたから、「恋」(eros)から生まれた、といった説明の仕方をするのである。こうしたやり方の語源論は、「元素である名前」に行き着くと、それ以上は進めなくなる。その元素の名前の由来、つまり最初の名前が真実であったことの根拠を、ソクラテスは広義の「模倣の原理」によって説明する。「事物の姿は文字と音節で模倣されてはっきりしてくる」

こうした語源論は「元素である名前」(422)に行き着くと、それ以上は進めなくなる。その元素の名前の由来、つまり最初の名前が真実であったことの根拠を、ソクラテスは広義の「模倣の原理」によって説明する。「事物の姿は文字と音節で模倣されてはっきりしてくる」(436D)。たとえばr(ロー)の文字は「発音に際して、他の場合に較べて舌が静止することが最も少なく、振動することが最も多いことから、rhein(流れる)、rheo(流れ)のように、運動を模倣するのに適している。あるいはl(ラブラ)は発音の際に一番よくすべるから、leia(つるつるした)、olisthanain(すべる)などを表すのに用いられる。

ところがソクラテスはこの同じ説明から逆の結論を引き出すのである。rが運動と動と硬さを表し。lがつるつるしたもの、柔らかなものを表すなら、硬さをsklerotesと呼ぶのはまちがいで、本来ならsklerotesと呼ぶべきであると言うのである。lは硬さと反対のものを表すのであるから、実際にlが用いられているのは、慣用によるものであることをソクラテスはクラテュロスに認めさせ、今度はヘルモゲネスの側につくのである。ソクラテスは語源的説明を、対立するヘルモゲネスとクラテュロスの両方を論駁するために利用する。そこに『クラテュロス』におけるソクラテスの両義的立場が明瞭に現れる。としてもソクラテスは語源的説明を否定しているのでなく、「命名者が最初の命名において誤りを犯す」(436D)ことがある、と言っているだけである。ソシユールの用語を用いるなら、ソクラテスは模倣原理にもとづいて、シニフィアンとシニフィエとのあいだに有縁性が存し、立法者はそのように言葉を制作した、とする立場を捨てていない。

こうした語源的説明は、一六、一七世紀に、ヘブライ語が人類の祖語であることを証明するために盛んにおこなわれたのである。エーコは前掲書でそれを「語源探索熱」と呼んでいる。以下にエーコの書によってその実態を垣間見よう。

中世から近世にかけて、バベル以前の人類最初の言語はヘブライ語であると、少数の反対者を除いて、一般に考えられてきた。ラテン語訳聖書が、とりわけウルガタ聖書が君臨していた中世にあっては、ヘブライ語についての十分な知識がないままに、ヘブライ

語を祖語とするのが当然とされていた。一六世紀から一七世紀にかけて、ヘブライ語が研究されるようになる、ヘブライ語祖語説は積極的に主張されるようになった。そしてそのための有力な手段は語源論であった。

ヘブライ語復活を協力的に推進したのは、ギヨーム・ポステル(一五〇一—一八二一)であった。フランス王の外交使節として何度もオリエントへ旅行したポステルは、その間にアラビア語、ヘブライ語、そしてカバラーを研究し、数々の著作で過激な説を唱えて、狂人扱いされた。だがポステルの所説は、ある意味で、ユダヤキリスト教的言語思想の典型を示している。すなわち、唯一の人類、唯一の世界、唯一の神があるように、唯一の言語「神から最初の人間に吹きこまれた聖なる言語」があったにちがいない。そして神は、事物にはさわしい名を与える能力をアダムに吹きこみ、アダムを教育したのである。⁽¹⁶⁾

祖語であるからには、そこからどんな言語が分れ出たかが問題になる。ポステルによれば、ヘブライ語はノアの子孫に由来し、そのヘブライ語からアラビア語、カルデア語、ヒンディー語が、そして間接的にギリシア語が派生したのである。さらに彼の『記号の異なる一二の言語のアルファベット——序文』では、ポステルはあらゆる言語がヘブライ語から派生したというだけでなく、ヘブライ語は諸民族を融合させるための重要な道具である、とも主張する。つまり言語を共有することが、すべての民族が普遍的一致をすための条件なのである。しかもポステルは、その普遍的一致はフランス王の主導のもとに実現されると信じる。なぜならノアの息子ヤフェトの子ゴメルは、ケルト族とガリア族の子孫だからである。さらにその援証として、*salilia* (ガリア人) はヘブライ語で「波にうち勝った者」、すなわちノアの洪水を生き残った者を指す、という伝統的な語源説を彼はもち出すのである。⁽¹⁷⁾

前述のように、一六、一七世紀に多くの著者たちは語源論に熱中した。その原理は、たとえば七世紀のイシドルスがしたように、*homo* (人間) は *humnus* (土) から由来するが、それは人間が泥から生まれたからである、といった模倣原理であった。ヘブライ語と他の諸言語との関係は、ヘブライ語と事物との一致を強調して、ヘブライ語が祖語であることを示そうとするか、現在の言語を語源的にヘブライ語に還元するか、の二つの方向をとる。第一の方向をとるクロード・デュプレは、ヘブライ語における動物の名称のなかには、動物の「自然誌」の一切が包含されているとする。たとえば、ヘブライ語では鷲がネシエルと呼ばれるのは、シヨール(見つめる)とヤーシヤル(一直線)とに合致した名称である。このようにヘブライ語は事物との近さを保存しているゆえに普遍言語なのである、というのである。⁽¹⁸⁾

一七世紀のエチエンヌ・ギシヤールは、ヘブライ語の語根に、倒置、アナグラム、置換などの操作をおこなって、そこから他の言

語が派生することを説明しようとする。このような操作は、あきらかにカバラーの影響であるという。アタナシウス・キルヒャーはその名も『バベルの塔』(1679)で、ヘブライ語を最初の「聖なる言語」(*lingua sancta*)とし、カバラー文献にのっとって、アダムが最初は事物の特性を模倣することによって、事物に名を与え、次にカバラーの技術にしたがって、「さまざまな名前の文字を結合したり、分離したり、置換したりしながら、それらの文字をさまざまな仕方、動物たちの本性ならびに特性と結びつけた」と主張する。キルヒャーは『クラテュロス』の語源的説明をも利用する。

もとよりニュッサのグレゴリオスをはじめ、人類の祖語をヘブライ語ではないと主張する人たちはいたし、ヘブライ語以外に、それはケルト語だとか、エジプト語とかを原初の言語とする説も現れた。国民語が形成されると、オランダ・フランダマン語とか、ドイツ語とかの自国語を最初の言語としての権利を主張する説も現れた。一七世紀の終わりになると、ライプニッツのように、アダムの言語は歴史の次元では決して復元できないと考える者も出てきた。しかしそれで原言語の探求が終わったわけではない。一八世紀末にサンスクリットが発見されると、ヘブライ語は王座を追われ、代わりにインド・ヨーロッパ語が覇権をにぎるようになる。

インド駐在の判事で文献学者でもあるウィリアム・ジョーンズによってサンスクリットの重要性がヨーロッパに知らされ、それは近代言語学を成立させる契機となった。ジョーンズは一七八六年にカルカッタのベンガル・アジア協会で論文を発表し、そのなかで古典インド語のサンスクリットがギリシア語、ラテン語、そしてゲルマン諸語と親族関係にあることを立証した。そこで述べられた次の言葉は、よく引用されて有名になった。

「サンスクリットは、その古さもさることながら、おどろくべき構造の言語である。ギリシア語よりも完全、ラテン語よりも豊かで、さらにそれら両語より洗練されていること、このうえない。だが、その動詞語根と文法形式において、サンスクリットが両語と強い類似性を示すのは、単なる偶然によって生まれる以上のものがある。そのためサンスクリット、ギリシア語、ラテン語を調べる言語学者は誰しも、それらがおそらくもはや存在しない、ある共通の源から分かれてきたと信じないわけにはいかないだろう」⁽²⁰⁾。

ここで示唆されているのは、サンスクリット、ギリシア語、ラテン語、そしてゲルマン諸語を比較研究することによって、「共通の源」つまり「印欧祖語」に遡ることができ、それこそ原言語にちがいない、ということである。ジョーンズの影響は一九世紀になって拡大し、サンスクリット研究が盛んになり、ヨーロッパはインドのすぐれた文学を学ぶとともに、比較歴史言語学を発達させた。F・シュレーゲルは、当時生まれた「比較解剖学」からの類推で「比較文法」の必要性を説いた。それは単に共時的比較にと

どまらず、言語の進化論的過去を復元することをめざしていた。この新しい言語学によるインドヨーロッパ語の共通祖語の探索は、ヘブライ語からアーリア語への転換をもたらした。アーリア語とは、インドヨーロッパ語と同義であり、後には、ヘルダーが名づけたセム語と対比されるようになる。

ここにおいて言語と人種、民族とが明示的に結びついたことが重要である。その結びつきをはじめに強調したのは、J・G・ヘルダーである。ヘルダーは『言語起源論』(一七七二)で、感覚の叫びが言語の起源であるとするルソーに反対し、「人間は内省を意識する動物である」として、「自然語」と人間の言語とを区別する。「人間は固有の内的状態におかれ、この内省意識を自由に作用させることにより、人間は言語を発明した」と主張する。ロマン主義者でルター派の牧師であるヘルダーは論文「ヘブライ詩の精神」(一七八二―八三)で、ヘブライ語を讃美する。同時に彼はヘブライ民族を、典型的な「民族」(Volk)とみる。彼によれば民族とは、一つの宗教、一つの国民、一つの文化、一つの社会・政治的実体のすべてが、一つの言語によって有機的に構成されていることを前提にして成立するものである。とはいえ、ヘルダーはヘブライ語を「エデンの園の言語」として考えていたわけではなく、ヘブライ語は原言語の「年長の娘たちの一人」と見ていた。⁽²¹⁾そして彼はそれぞれの民族の文化の特性を尊重する文化的多元論の立場をとっていた。ところが晩年の『歴史哲学』(一七八四―九一)では、諸文化のなかでキリスト教文化に優先権を与え、ヨーロッパのキリスト教徒の白人だけを特別扱いするようになる。

エルネスト・ルナンも歴史家から民族主義者あるいは人種主義者へと変身していった。彼はヘブライ語を含む近東のセム語とアーリア語、セム人とアーリア人、ユダヤ教とキリスト教を対比させて論じる。ルナンはコレージュ・ド・フランスのヘブライ語教授としてセム語を研究し、教授した。彼にとり、言語と人種、民族とは切り離せない関係にある。彼はセム語とアーリア語、すなわちインドヨーロッパ語と、またセム人とアーリア人とを比較することから、さまざまな帰結を引き出した。ルナンは『言語起源論』(一八四八)などで、これら二つの言語、人種は共通の源泉から発し、「四、五歳ころに完全に分かれた双子の兄弟」であると主張する。その幼年時代を過ごした土地は、古代の地理学者のあいだで知られたイマウスというアジアの山で、そこは旧約聖書の「エデンの園」の記述に合致し、それはヒマラヤの近くの古代王国の「庭」という意味をもつウディアナであったのではないかと、ルナンは推測する。⁽²²⁾いずれにしてもルナンは人類の言語の発祥地を中央アジアに設定するのである。⁽²³⁾

ルナンはセム人とアーリア人とは、他のどの民族よりも優秀であるとしたうえで、今度はセム語に対するアーリア語の、セム人に

対するアーリア人の優れていることを立証することに力をつくす。そのためにルナンはキリスト教をユダヤ教から引き離すことさえする。ルナンの思想に反ユダヤ主義の淵源を見ようとするオランダールは、それを次のように言い表す。

「こうして西洋のキリスト教徒は、言語学の体系上はアーリア系で、宗教的にはセム系という謎に満ちた血統をもつにいたったが、ルナンはその問題を解決するために、まずイエスをユダヤ教から解放し、それからキリストをアーリア化した人々と運命を共にする」⁽²⁴⁾。

こうしてサンスクリットの発見は、ヘブライ語に代わってアーリア語、アーリア人を復権させた。たしかにインドヨーロッパ語の共通祖語の探索は、言語学の方法を近代化し、科学としての言語学を確立した。しかしある意味で実証主義者ルナンに典型的に見られるように、それは宗教・言語・民族のイデオロギー化をとまなっており、彼はエデンの園の言語をインドヨーロッパ語の祖語につなげようとした。近代言語学の背後に、創世記二章、一〇章の神話が垣間見えるのである。言語は自民族中心主義の強力な発生源であり、インドヨーロッパ語中心主義は、チョムスキーの生成変形文法にいたるまで生き続けている。これを要するに、欧米の近代言語学もおユダヤキリスト教の言語神話に捕らえられていると言えまいか。

言語の神話を生み出すのは、神話的言語である。言語が言語の神話をつくりだす。とすればまず、言語にまつわる神話を非神話化する必要がある。

四、言語の神話と神話の言語

創世記の言語神話を離れても、一般に言語と神話は密接な関係にある。エルンスト・カッシーラーもこう述べている。

「言語と神話は血縁に近い。人間文化の最初の段階において、両者の関係は甚だ密接であり、両者の協同は甚だあきらかなので、これらを分離することはまず不可能である。両者は同一の根から出た異なる二つの芽なのである。どんな所の人間であろうと、人間は必ず言語の能力をもち、神話形成の機能の影響のもとにあるのである」⁽²⁵⁾。

詩人ポール・ヴァレリーもまた言語について考究したあげく、神話に行きつく。

「神話とは、言葉を原因とすることによってのみ存在し、存続するような一切をいいます。いかに不可解な話、いかに奇妙な

噂、いかに支離滅裂な言葉でも、われわれがそれに何らかの意味を付与しえないようなものはありません。どんなに不思議な言語に対しても、何らかの意味を与えるような仮想が存在します⁽²⁶⁾。

神話をつくりだすものは、人間の精神にほかならない。精神は嘘を真実と結合し、そして \wedge 神話の神 \vee である \wedge 時間 \vee をつくりあげた。歴史はすべて純粹時間の虚空に、想念によってつくりあげたものである。精神はただ何事が起こった、とだけを確認に知るのみで、その先行者、 \wedge 原因 \vee を仮定して、時代、状態、原理などを \wedge 分婉 \vee してしまう。そこでヴァレリーは続けてこう述べる。

「明日も神話であり、宇宙も神話であることを考えてもみなさい。また数も、愛も、実在も、無限も、正義も、民族も、詩も、地球さえも神話であることを考えてみなさい。しかも極地でさえも神話なのです。なぜなら極地へ行ったらと主張する人も、じつは言葉と切り離せないもろもろの理由によって、そこへ行ったと考えたにすぎないのです⁽²⁷⁾」。

じつはわれわれの精神が神話を必要とするのである。「誤謬」と「偽」とを混同してはならない。偽とは真ならざるものであるが、それは必要なものである。三度ヴァレリーはこう言う。

「いたるところ、文明のあらゆる場所、あらゆる時期、あらゆる信仰において、偽が真を支えていることは、一種の絶対的法則です。真は偽をみずからの祖先とし、原因とし、起源とし、目的とします。「・・・」およそ古代とか因果関係とか、事物の原理とかいうものは神話的創作物であって、単純な法則にしたがうものです⁽²⁸⁾」。

偽のうえに真を産み出すこの力を「神話的構想力」と呼ぶなら、その力は言語のみならず、社会のさまざまな約定と信用制度をつくりだしている、とヴァレリーは考える。三木清はこのヴァレリーの神話的構想力に暗示されて『構想力の論理』第一と第二を書いた。その第一の「神話」の章では、ロゴスとパトスの総合の能力を構想力とし、その構想力を神話的構想力に求めた。

このように言語と神話とが互いに派生しあっているとすると、事物の起源を論じれば、究極に神話に行き着かざるをえない、とヴァレリーはいう。

「初めというものの観念についていえば——絶対の初めの意味であるが——その観念は必ず神話である。およそ初めというものは暗合であり、ここでわれわれは、 \wedge すべて \vee と \wedge 無 \vee とのあいだに、何かある接触を想像することが必要であろう。それを考えようとすれば、人はおよそ初めというものが帰結であり、初めとは何ものかを出来させることであることを見いだすのである⁽²⁹⁾」。

事物の起源、絶対の初めを求めることは、結局、何かをつくりだすことに終わる。絶対のはじまり、起源とは「偶像」idolaには

かならない。そこでヴァレリーは「はじめに言 (logos) があった」をもじって、「『はじめに神話があった』そしてはじめには常に神話があるだろう」と言い換えるのである。⁽³⁰⁾

宇宙の絶対的なはじまりを仮定するように、言語の絶対的なはじまりを仮定するのは神話をつくることにはかならない。神話には物事の由来を説明する「起源神話」がある。言語の起源はそうした起源神話中の神話なのである。アダムと言語という言い方自体がすでに神話である。これに関連して示唆的なのは、エドワード・サイードが「はじめ」(beginning) と「起源」(origin) とを区別していることである。

「最初に△起源▽に対立するものとして△ははじまり▽という発想がある。前者は聖的、神話的、特権的で、後者は俗的、人間が作りだすもの、不断に再検証されるものである」。⁽³¹⁾

サイードによれば、「XはYの起源である」という表現と、「はじまりAはBにいたる」という表現には違いがある。「はじまり」は「差異をつくる」ことである。もし起源を絶対的なはじまりとするなら、サイードがいうように、それは「聖なる」初めであり、神によって創始された創造説、あるいは神授説に属するものである。他方、サイードのいう「はじまり」は人間の制作についていわれる。人間の作る営みは、はてしなく差異をつくりだすことである。サイードはその考え方を、ジャック・デリダの「差延」différance の概念から引き出した。デリダは『グラマトロジーについて』でエクリチュールを論じて、話し言葉が先か、書き言葉が先かの論議はすでに「起源神話」に冒されているのであり、そこで彼は記号の差延作用を示すために、あえて「原書記」archi-écritureという神話的概念をつくりだした。それはどこにも存在しないが、記号の差異を生み出す運動を指すのである。

差異の運動は、起源を起源の彼方へとはてしなく遡行させていき、起源というものを解消してしまうことである。それは「原言語」[Ursprache, langue originaire] を否定することである。すでに見てきたように、人類の「原言語」への執着は強く、抜きがたいものがある。一八世紀には言語起源論が流行した。J・P・ジュースミルヒは「最初の言語が人間からではなく、創造主からのみその起源を有することを証明する論」を一七六六年に発表して、賛否両論をまきおこした。ルソーやコンディヤックは原始的な言語から言語が生成、進化していく過程を想像しようとした。しかし他の事物の起源論と違って、言語の起源論は幼児から成人への成長過程をなぞることはできない。たしかに人間は誕生してから徐々に言語を習得していく。しかし習得する言語はすでに完全にできあがった言語であり、誕生期の言語ではない。幼児に与えられる言語は完全な言語の全体である。幼児は一挙に言語のなかに入れられるので

ある。人は誕生期の言語に立ち会うことはできないし、まして言語以前にさかのぼることはできない。だからこそバンヴェニストは言語の起源を論じることを避けた。言語をもたぬ人間を考えることはできない、というのである。デリダは「テキスト外というものはない」と言った。言語起源論のアポリアは、言語の外に出ることができずに、言語をとらえようとするところにある。言語の誕生をとらえるメタ言語が必要なのである。創世記の物語では、アダムが語る以前に神が語った。神の言語を、われわれはメタ言語とした。言語のはじまりを言語で論じるには、言語外のアルキメデスの支点が必要である。だがそれはどこにあるのか。

アダムの言語から地上のあらゆる言語が派生した、という単一言語発生説、あるいは原言語という観念こそ神話なのであり、われわれはその神話にずっと欺かれてきたのであり、あるいは依然として欺かれ続けているのかもしれない。単一言語発生説に代わるのは、言語の多元発生説である。地球上で離されているあまたの言語を語族に分類することはできても、一つとして同じ言語はない。また異なる二つの言語を綜合する第三の言語、理想言語はない。諸言語は相対的關係にある。またG・スタイナーが言うように、「言語にはへ卑小な言語とか、劣悪な言語などは存在しない——その言語なりに一連の世界を構築し、記憶を整理し、その地形図を形作るものである」⁽³²⁾。ある特定の言語を人類最初の言語とすることは、自国語中心主義のあらわれに過ぎない。言語のはじまりを論じることは、人間の言語能力の発達を論じることでなくてはならない。

注

- (1) Umberto Eco, *La ricerca della lingua perfetta nella cultura europea*, Roma-Bari, Laterza, 1993. 上村忠男、広石正和訳『完全言語の探求』平凡社、1995, pp.117-118.
- (2) アウグスティヌス『神の国』大島春子、岡野昌雄訳、「アウグスティヌス著作集」14、教文館、1980, p.128.
- (3) アウグスティヌス『創世記逐語注解』片柳栄一訳、「アウグスティヌス著作集」16、教文館、1994, p.305.
- (4) Maurice Olender, *Les langues du paradis. Aryens et Sémites: un couple providentiel*, Seuil, 1989. 浜崎設夫訳『ヘブレンの園の言語——アリア人とセム人撰理のカップル』法政大学出版局、1995, p.7.
- (5) エーコ、前掲書 pp.29-30.
- (6) Thorleif Boman, *Das hebraische Denken in Vergleich mit dem Griechischen*, Vandenhoeck & Ruprecht, 1954. 植田重雄訳『ヘブライ人とギリシヤ人の思惟』新教出版社、1957, pp.55-56.
- (7) André Neher, *L'exile de la parole. Du silence biblique au silence d'Auschwitz*, Seuil, 1970. 西村俊昭訳『言葉の捕囚——聖書の沈黙か

- らアウシュヴィッツの沈黙へ』創文社、1984、p.48.
- (8) アウグスティヌス『創世記逐語注解一』p.14.
- (9) 同書p.279.
- (10) エーロ前掲書p.36.
- (11) Roy Harris, Talbot J. Taylor, *Landmarks in linguistic Thought. The Western Tradition from Socrates to Saussure*, Routledge, 1989.
齋藤伸治、滝沢直宏訳『言語論のランドマーク——ソクラテスからソシュールまで』大修館書店、1997、pp.91-92.
- (12) Paul Ricoeur, 《Le paradigme de la traduction》, in *Esprit*, juin 1999, p. 14.
- (13) *Ibid.*, p. 14.
- (14) エーロ前掲書p.42.
- (15) プリットン『クラリチアロス』水地宗明訳、『プリットン全集』2、岩波書店、1992.
- (16) エーロ前掲書p.120.
- (17) 同書p.122.
- (18) 同書p.127.
- (19) 同書p.132.
- (20) J. E. Sandays, *History of classical scholarship*, Cambridge, 1921, pp.438-439.
- (21) オランチール前掲書p.46.
- (22) Ernest Renan, 《De l'origine du langage》, *Oeuvres complètes, tome 8*, Calmann-Lévy, 1958, pp.566-567.
- (23) *Ibid.*, p.117.
- (24) オランチール前掲書p.96.
- (25) Ernest Cassirer, *An essay on man*, 宮城道雄訳『人間』岩波書店、1956、p.155.
- (26) Paul Valéry, 《Petite lettre sur les mythes》, *Oeuvres complètes 1*, Gallimard, 1958, pp.963-964.
- (27) *Ibid.*, p.965.
- (28) *Ibid.*, p.966.
- (29) Paul Valéry, 《Au sujet d'Eureka》, op. cit., pp.863-864.
- (30) *Ibid.*, p.867.
- (31) Edward Said, *Beginnings: Intention and Method*, 1975. 山形和美、小林昌夫訳『始まりの現象——意図と方法』法政大学出版社、1992、p. X.
- (32) George Steiner, *After Babel*, Oxford University Press, 1992. 亀山健吉訳『バベルの後』上、法政大学出版社、1999、p. XIX.